

關於頻率副詞之考察 —以高頻率副詞為中心—

江雯薰

淡江大學日本語文學系副教授

摘要

本論文將「たえず」「しじゅう」「しょっちゅう」「よく」視為高頻率副詞，以明確各個詞在構文上及意思上的特徵為目的。以有無時間限定性、句尾述語的特徵、整個句子是否已實現、能否和否定句相呼應、能否和程度副詞一起使用這些方法來考察這四個詞的構文特徵。另一方面，從是否能相互置換來了解這四個詞在意思上的特徵。

由構文上來看，四個詞都未受制於時間限定性；「運動性」「界限性」對四個詞的句尾述語來說是重要的這兩點為四個詞的共通點。相對於此，具有「狀態性」的述語能出現在「たえず」「しじゅう」的句尾；「たえず」「しじゅう」能和否定句相呼應；「しょっちゅう」「よく」能和程度副詞一起使用這些為這四個詞的相異點。

由意思上來看，高頻率副詞有像「たえず」「しじゅう」這樣表行為不間斷持續著的副詞，也有像「しょっちゅう」「よく」這樣表相同行為重複地發生的副詞；「しょっちゅう」比「よく」多用在負面評價上這樣的特徵。

關鍵字：高頻率副詞 時間限定性 運動性 界限性 狀態性

**A Study on Adverbs of Frequency:
Focusing on High-Frequency Adverbs**

Chiang, Wen-shun

Associate Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

This study examines high-frequency adverbs “taezu,” “shijyuu,” “syottyuu,” and “yoku” to better understand the sentence structure and meaning of each adverb. Traits analyzed concerning sentence structure include whether or not they are time limited, characteristics of the predicate clause, if the sentence depicts an “already completed” action, and the connotation of the speaker. We also analyzed whether or not these adverbs were interchangeable in meaning.

Study results concerning sentence structure show that none of the four adverbs are time limited. The motion and boundaries of their predicate clauses are a shared, important characteristic that all four adverbs share. Predicates that depict status can appear after “taezu” and “shijyuu”; “taezu” and “shijyuu” can draw parallels to negative sentences; “syottyuu” and “yoku” may be used together with adverbs of degree; and “shijyuu” and “syottyuu” are used mostly in a negative connotation.

As concerning meaning, high-frequency adverbs such as “taezu” and “shijyuu” are used to depict actions continuing without interruption, whereas “syottyuu” and “yoku” are used to express the same action occurring repeatedly. “Syottyuu” is used more frequently in a negative context.

Keywords: high-frequency adverbs, limited time, motion, boundaries, status.

頻度副詞に関する一考察 —高頻度を表す副詞をめぐって—

江雯薰

淡江大学日本語学科准教授

要旨

本稿は、「たえず」「しじゅう」「しょっちゅう」「よく」を高頻度を持つ副詞とし、それぞれの構文的・意味的な特徴を明らかにすることを目的としている。研究方法としては、時間的限定性の有無、文末の述語における特徴、文全体が実現しているかどうか、否定文と呼応できるかどうか、程度副詞と共起できるかどうかといった点から四語の構文的な特徴を明確にする。また、置き換えを手掛かりにして、四語の意味的な特徴を考察する。

構文的にみると、四語のいずれも時間的限定性に制約されていないこと、「運動性」「限界性」は四語の文末の述語にとっては重要であること、四語のいずれも実現した事態を表すことで共通している。それに対して、「状態性」を持つ述語は「たえず」「しじゅう」の文末にもくることができること、「たえず」「しじゅう」は否定文と呼応できること、「しょっちゅう」「よく」は程度副詞と共起できることで異なっている。

意味的にみると、高頻度副詞には「たえず」「しじゅう」のように行為を間断なく継続しているものもあれば、「しょっちゅう」「よく」のように同じ行為を繰り返し何度も行うものもあること、「しょっちゅう」は「よく」よりマイナス評価的に用いられることが言える。

キーワード：高頻度副詞 時間限定性 運動性 限界性 状態性

頻度副詞に関する一考察
 一高頻度を表す副詞をめぐって一
 江雯薫
 淡江大学日本語学科准教授

1. はじめに

現代日本語には、「たえず」「しじゅう」「しょっちゅう」「よく」（以下では四語と称する）のような頻度を表す副詞がある。これらは、辞書類からの説明をみると、『日本国語大辞典(第二版)』(2002)では、次のように述べられている。

「たえず」：〔連語〕（動詞「絶える」の未然形に助動詞「ず」の連用形が付いたもの。後世は副詞として扱う）ある動作が止むことなくひき続いて行なわれているさま。常に。いつも。間断なく。

「しじゅう」：〔副〕 始めから終わりまで。また、ある動作が頻繁に行われるさまを表わす。たえず。常に。

「しょっちゅう」：〔副〕（「しょちゅう（初中）」の変化した語か）始終。いつも。常に。絶えず。しょちゅう。

「よく」：〔副〕（形容詞「よい」の連用形から）たびたび。ともすれば。しばしば。ちよくちよく。まま。

以上の説明から、四語は出来事が頻繁に、または間断なく行われるさまを表す、つまり高頻度を表す¹という点で共通していると言える。また、これらは構文的な特徴ではなく、四語の意味的な特徴を説明すると思われる。本稿は、四語を高頻度を持つ副詞²とし、それぞれの構文的・意味的な特徴を明らかにすることを目的としている。

¹高頻度を表す副詞には、四語の他に、「頻繁に」などもある。本稿は使用頻度の高さから「たえず」「しじゅう」「しょっちゅう」「よく」を中心に考察する。

²仁田(2002)では、頻度副詞については、「いつも」「常に」の類、「しょっちゅう」のように高頻度を表すもの、「たびたび」のように中頻度を表すもの、「まれ」のように低頻度を表すものに分けられている。

2. 先行研究

先行研究について、管見の限りでは個々の副詞について述べているのは森田(1989)と飛田・浅田(1994)であり、高頻度副詞全体の特徴について述べているのは仁田(2002)である。

まず、個々の副詞について述べているものを見る。

森田(1989)は、「しじゅう」「しょっちゅう」について、「両語とも動作性の語に係り、状態を修飾することはあまりない。静止状態「彼女はしじゅう美しい」などとはあまり言わない。しかし、特殊な例として、動きや変化を前提とした状態「私はしょっちゅう忙しい」「私はしょっちゅうこわいんです」「彼はしょっちゅう暇がない」などがある」とし、また「「しじゅう／しょっちゅう」は連続行為・作用を表すというより、同じ行為・作用が頻繁に間欠的に繰り返される状態である。その点では「しじゅう」のほうが「しょっちゅう」より連続性が濃い」ともしている。

「たえず」について、「これは動作・作用が中断なく続いているさま。状態を表す語や、否定の表現には係らない」としている。

「よく」について、「十分に行うことは、その時の行為の完全さとともに、同じ行為を繰り返し何度もおこなう頻繁さとともなる。「よく噛む」ことは「十分に噛む」ことであり、「何度も噛む」ことでもある。繰り返すことによって完全さが成し遂げられる行為や作用・現象などの場合、「よく」は「何回も」「幾度も」の意味を強める」としている。

飛田・浅田(1994)は、「しじゅう」について、「動作や行為に切れ目がない様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。述語にかかる修飾語として用いられる。ややくだけた表現で日常会話中心に用いられ、かたい文章中にはあまり登場しない。動作や行為がほとんど切れ目なく継続して行われる様子を表す」としている。

「しょっちゅう」について、「動作や行為の頻度が非常に高い様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。述語にかかる修飾語として用いられることが多い」とし、また「動作や行為の頻度が非

常に高いことを表し、しばしば慨嘆の暗示を伴う」ともしている。

「たえず」について、「途切れることなく行動し続ける様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。述語にかかる修飾語として用いられる。ふつう、動作が途切れることなく継続する場合に用いられ、状態が継続する場合には用いられない」としている。

「よく」について、「頻度の高い様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。動詞にかかる修飾語として用いられる」とし、また「頻度や傾向が非常に高いためにそれが普通であるように感じられるというニュアンスがあり、しばしば無価値の暗示を伴う」ともしている。

次に高頻度副詞全体の特徴について述べているものを見る。

仁田(2002)は、「たえず」「しじゅう」「しょっちゅう」「よく」について、「これらの頻度の副詞は、いずれも、事態が高頻度に繰り返され反復することを表している。高頻度を表す「タエズ」「シジュウ」「ショッチュウ」「ヨク」の中であって、「タエズ」は少し異なるところを有している」としている。

今までの研究では、『日本国語大辞典(第二版)』(2002)のように、主に四語の意味的な違いを説明し、構文的な違いはあまり述べられていないと言える。本稿では、時間的限定性の有無、文末の述語における特徴、文全体が実現しているかどうか、否定文と呼応できるかどうか、程度副詞と共起できるかどうか、といった点³から構文的に四語を考察する。また、四語の置き換えを手掛かりにし、四語の意味的な特徴を明確にする。

³高頻度副詞に属する四語は、時間との関連を明確にするために、「時間的限定性の有無」、「文末の述語における特徴」、「文全体が実現しているかどうか」といった点から考察する必要がある。また、「否定文と呼応できるかどうか」という観点によることで、四語の意味的な特徴を区別でき、「程度副詞と共起できるかどうか」という観点によることで、高頻度副詞全体の特徴を明らかにすることができる。

3. 構文的な特徴

3.1 時間的限定性の有無について

時間的限定性の有無という観点からみると、次の(1)～(4)のように時間的限定性がない場合もあれば、(5)～(8)のように時間的限定性がある場合もある。(以下の用例では四語の下に一重線を、主語の下に点線を引いて示す)

- (1) 酔っばらいは始終問題を起こす。(BCCWJ)
- (2) 人間は不完全だから絶えず失敗を繰り返します。(BCCWJ)
- (3) 戦争はしょっちゅう人々にありとあらゆる不幸をもたらす。(BCCWJ)
- (4) トウェンティフォー・セブン。英語では、片時も離れない恋人同士が、この言葉をよく使う。一日に二十四時間、一週間に七日間。あなたと一緒にいたい。(24.7)

(1)は「酔っばらい」、(2)は「人間」、(3)は「戦争」、(4)は「片時も離れない恋人同士」という一般主体の性格・特性を表す文である。それぞれは、話し手の過去の経験から一般論を述べる文である。それに対して、

- (5) 「葛山君は、ぼくのほうで始終仕事を出している。ここ三年来、彼には相当な金を払っているのだ。…(後略)…。」
(紅い)
- (6) 父大臣の悲しみはいうまでもない。夕霧の大将は、親友の死病を嘆いて、たえず見舞いに来ていたが、このたびの昇進のお祝いを述べにまっさきに来た。(新源氏)
- (7) 節子はいちいち二人のすることが気に触って、その度に注意をする。葉子としょっちゅう口争いになった。(世間)
- (8) 毎日、片時も離れることがなく彼女はぼくの傍にいたのだ。公園の小高い丘の上の長椅子に並んで座り、よく夜空に灯る月を見上げた。(冷静)

(5)は「葛山君」、(6)は「夕霧の大将」、(7)は「節子」、(8)は「彼女」という個別主体の一時的な状態を表す例である。

(1)～(8)から、四語のいずれも一般主体で一般論を述べる場合にも、個別主体で一時的な状態を述べる場合にも用いられると言える。つまり、四語は時間的限定性に制約されていない。

3.2 文末の述語の特徴について

文末の述語について、まず、状態や存在を表す動詞を見る。(以下の用例では述語の下に波線を引いて示す)

- (9) 主人は五十過ぎぐらいの男で、始終家にいた。(白い)
- (10) 街角に、ラジオに、テレビに(とくに夕方)と、どこにも絶えず政治家がいる。(BCCWJ)
- (11) 近頃、授業中メールする学生がしょっちゅういる。(作例)
- (12) 「おれはいろいろと考えたんだけど、昔はばあやつきの大学生というのはよくいた。…(中略)…」(太郎)

「いる」は、(10)～(12)では「見られる」と解釈できるが、(9)では「存在」や「状態」を表す。また、

- (13) 日に七万遍となえたことも始終ある。(BCCWJ)
- (14) 夕霧はそれを哀れと見ながら、宮のこともたえず心の片すみにある。(新源氏)
- (15) 確かに、そんな気がすることがしょっちゅうある。(バリ)
- (16) 長子よりも下の子が気に入っている場合はよくある。(乱雲)

「ある」は、(13)(15)(16)では「起こる」と解釈できるが、(14)では「存在」や「状態」を表す。(9)～(16)から「状態性」を持つ述語は「しじゅう」「たえず」の文末にはくることができるが、「しょっちゅう」「よく」の文末にはくることができないと言える。

次に、動作や変化を表す動詞を見る。

- (17)○彼女は両親の面倒を見るために{しじゅう/たえず/しょっちゅう/よく}実家に帰る。(作例)
- (18)○この会社のホームページは{しじゅう/たえず/しょっちゅう/よく}変わる。(作例)

(17)の「帰る」は動作を、(18)の「変わる」は変化を表す動詞であり、どちらも「運動性」を持つ動詞である。(17)(18)のように「運動性」を持つ述語が四語の文末にくることができる、ということから、「運動性」は四語にとって重要であると言える。しかし、次の(19)(20)のように「運動性」を持っていても非文になる場合がある。

(19) *子供は {しじゅう/たえず/しょっちゅう/よく} 遊ぶ。
(作例)

(20) *彼は {しじゅう/たえず/しょっちゅう/よく} 走る。
(作例)

(19)の「遊ぶ」と(20)の「走る」は「限界性」を持たない動詞であり、四語と共起すると、非文となる。もし、「毎日公園で」のような補語を二文に入れるなら、許容度が高くなる。

(19') 子供は毎日公園で {しじゅう/たえず/しょっちゅう/よく} 遊ぶ。(作例)

(20') 彼は毎日公園で {しじゅう/たえず/しょっちゅう/よく} 走る。(作例)

それは、「毎日公園で」が「遊ぶ」「走る」という動作に「限界性」を与えるからである。また、

(21) *彼女は {しじゅう/たえず/しょっちゅう/よく} 田舎に 住む。(作例)

(22) ○彼女は {しじゅう/たえず/しょっちゅう/よく} ホテルに 泊まる。(作例)

「住む」は「長期間ある場所に居住する」ことを表し、(21)のように四語と共起すると、非文となる。それは、「住む」の「長期間居住する」という意味が、四語の表す頻度の高さと相容れないからである。もし、(22)のように「泊まる」なら、「旅先・外出先・勤務先などで夜を過ごす」ということになり、「限界性」を持つので、「住む」より許容度が高くなる。

このように見ると、「運動性」「限界性」を持つことが重要である。ただ、「たえず」「しじゅう」はそれに加えて、「状態性」を持つ述語もくることができる。

また、文末における述語の語形をみると、「る」形と「た」形といった完成相で表すものもあれば、「ている」形と「ていた」形といった継続相で表すものもある。それぞれの使用頻度をみると、次の<表1>のようになる。

<表1>

	完成相		継続相		実例数
	る形	た形	ている形	ていた形	
たえず	89 例 (全体の 27.38%)	77 例 (全体の 23.69%)	92 例 (全体の 28.31%)	67 例 (全体の 20.62%)	325 例
しじゅう	34 例 (全体の 27.42%)	25 例 (全体の 20.16%)	29 例 (全体の 23.39%)	36 例 (全体の 29.03%)	124 例
しょっちゅう	61 例 (全体の 21.33%)	97 例 (全体の 33.92%)	55 例 (全体の 19.23%)	73 例 (全体の 25.52%)	286 例
よく	105 例 (全体の 38.04%)	124 例 (全体の 44.93%)	11 例 (全体の 3.99%)	36 例 (全体の 13.04%)	276 例

<表1>から、「よく」はほかの三語より、「る」形と「た」形といった完成相で、「しじゅう」はほかの三語より「ている」形と「ていた」形といった継続相で表す傾向があると言える。また、継続相で表す場合は、次の(23)～(26)のように、完成相に置き換えても意味は変わらないものがある。

(23) 廊下を通る人の足音がしじゅう{○している／○する}。⁴

⁴「しじゅう」の実例では、(27)のように「ている」形を「る」形に置き換えら

airiti

(作例)

- (24) 腰に水に浸した藁束を下げ、それに火を煙すのである。体の周りからは絶えず煙が出ている{○出る}ので、煙を探せば志方のいるところはすぐ分る。(花埋み)
- (25) 「おかあのほうがもっとすごい。最近日本にいないもの。チベットだモンゴルだって、しょっちゅう一人で出かけている{○出かける}。」(語る)
- (26) 作中の小隊は「殖生の宿」など小学唱歌とともに第一高等学校の寮歌を実によく歌っている{○歌う}。(豎琴)
- (23)の「している」を「する」に、(24)の「出ている」を「出る」に、(25)の「出かけている」を「出かける」に、(26)の「歌っている」を「歌う」に置き換えても意味的に変わらないと思われる。それぞれの「ている」は、四語と共起すると、「くりかえし」の意味と重なり、「ている」形と「る」形のどちらを用いても意味的には変わらない。このような場合は、「る」形と「ている」形といったアスペクトの対立が希薄になると考えられる。それに対して、
- (27) 「きみの事件のときも、警官の心証を害しているし、かなり爆発的な面がある。それに比べ、きみは始終おちついている{*おちつく}。…(後略)…」(冬の旅)
- (28) インターナショナルな〈歌〉をさがしに出たその旅のなかで、作者はたえず民謡やユパンキなどの民族的な歌に心をひかれています{*ひかれる}。(風に)
- (27)の「おちついている」は「安定した状態になっている」状態を、(28)の「ひかれています」は「心が引きつけられている」状態を表す。それぞれの「ている」形を「る」形に置き換えると、意味が変わる。それぞれの「ている」は、「しじゅう」「たえず」と共起すると、ある行為や状態などが継続して行なわれていることを表し、「る」形に置き換えると意味が変わってしまうからである。この場合は「し

れないものが多いが、(23)のように置き換えられる場合もある。

じゅう」「たえず」の語彙的意味に左右され、「ている」形と「る」形といったアスペクトの対立があると考えられる。

以上から、「ている」形を「る」形に置き換えられた場合は、四語の表す頻度性で「る」形と「ている」形といったアスペクト的対立が希薄になること、置き換えられない場合はその語の語彙的な意味に左右されていることが言える。

3.3 文全体が実現した事態を表すかどうかについて

四語を用いる文全体は実現した事態を表すかどうかをみると、次のようなことが見られる。

(29) ○彼はトイレを {しじゅう / たえず / しょっちゅう / よく}
掃除していた。(作例)

(30) ○彼はトイレを {しじゅう / たえず / しょっちゅう / よく}
掃除する。(作例)

(29)の「掃除していた」は、過去において一定時間何度も掃除していたことを表す。四語と共起すると、いずれも実現した事態を表す。また、(30)の「掃除する」のように未来の時点においても実現する確信がある場合にも用いられる。

このようにみると、四語を用いる文全体が実現した事態を表さなければならないと言える。それは、事態が実現しないと、四語の表す頻度の高さを際立たせないからである。

3.4 否定文と呼応できるかどうかについて

否定文と呼応できるかどうかについて考察すると、(31)(32)のように「たえず」「しじゅう」とは呼応できるが、(33)(34)のように「しょっちゅう」「よく」とは呼応できない。

(31) 園子は笑いをたえず忘れなかった。(孤高)

(32) さいわい、あたりは漆を溶いたような五月闇だったし、当麻は始終ひと言も声を立てなかった。(翡翠)

(31)は「いつも笑っていた」を、(32)は「ずっと黙っていた」を意味し、いずれもある動作が続いているさまを表す。「たえず」「しじゅう」が否定文と呼応できるのは、ある動作が途切れなく、ひき

続いて行なわれているさまを表すからである。「たえず」について、森田(1989)の、「これは動作・作用が間断なく続いているさま。状態を表す語や、否定の表現には係らない」といった説明には不十分などところがあると言える。それに対して、

(33) *機械音痴なので、パソコンはよく使わない。(作例)

(34) *海外旅行はしょっちゅう行かなかった。(作例)

(33)(34)のように「しょっちゅう」「よく」が否定文と呼応できないのは、同じ動作や行為を繰り返して何度も行うさまを表すからである。これらは否定的に表現すると、「あまり使わない」「あまり行かなかった」のように用いられる⁵。

以上から、否定文と呼応できるかどうかは四語の語彙的な意味と関わっていると言える。

3.5 程度副詞との共起について

程度副詞との共起について、高頻度副詞が程度副詞の外側にある場合と、内側にある場合とがある。以下では、「非常に」を代表として取り上げるが、高頻度副詞が程度副詞の外側にある場合は、「*よく非常に」「*しょっちゅう非常に」「*たえず非常に」「*しじゅう非常に」のように、用いることはできない。それに対して、高頻度副詞が程度副詞の内側にあると、「*非常にたえず」「*非常にしじゅう」は用いられないが、(35)のように「非常にしょっちゅう」「非常によく」は用いられる。このことは仁田(2002)でも述べられている⁶。(以下の用例では程度副詞の下に二重線を引いて示す)

⁵ 「しょっちゅう」が否定文と呼応できる場合は、次の(1)のように「そんなに」のような語と共起するのである。

(1) 父がふいに言った。「え? そんな、クラブにも入ってないのにコンパなんてそんなにしょっちゅうないわよ。…(後略)…。」(つぐみ)

「そんなに」は打ち消しの語を伴って、「程度が思ったほどでないさま」を表し、「しょっちゅう」の表す頻度の高さを限定するのである。

⁶ 仁田(2002)では、「高頻度も低頻度も、程度の極端なものであった。極端であることにより、程度の副詞によって、その程度性を際立たせることが、自然でありかつ効果を持つことになる。(P289)」と述べられている。

(35) この地方は非常に{△しょっちゅう／○よく}台風が来る。

(作例)

(35)では、程度の甚だしさを表す「非常に」は「しょっちゅう」より「よく」とのほうが共起しやすいと思われる。「非常に」は「よく」と共起すると、「よく」が表す頻繁さの程度を強調することができるが、「しょっちゅう」の場合は際立たない。このことから、「しょっちゅう」が表す頻度の高さは「よく」より高いと言える。

ところで、「非常にしょっちゅう」「非常によく」を構文的に考察すると、「運動性」「限界性」は文末における述語にとっては重要である。

(36) この会社では無断欠勤をする社員が非常に{△しょっちゅう／○よく}いる。(作例)

(37) この中学校では苛めは非常に{△しょっちゅう／○よく}ある。(作例)

(36)の「いる」は存在を表し、「状態性」を持つものであるが、「この会社では無断欠勤をするケースが非常に{しょっちゅう／よく}見られる」と解釈できるので、非文とならない。一方、「ある」は「状態性」を持つ静態動詞であるが、(37)のように「起こる」と解釈でき、「運動性」⁷をもつ場合もある。「いる」「ある」は「状態性」を持つ述語であるが、「運動性」を持つと解釈できる。また、「運動性」を持つ述語が文末にくる場合をみると、

(38) 彼女はドラマに非常に{△しょっちゅう／○よく}出演する。(作例)

(39) 彼女は意見が非常に{△しょっちゅう／○よく}変わる。(作例)

(38)の「出演する」は動作を、(39)の「変わる」は変化を表し、いずれも「運動性」を持つ動詞である。このような動詞が文末にくることができる、ということから、「運動性」は「非常にしょっちゅう」

⁷「運動性」とは出来事や事態が動作や変化をしている様子を表すことをいう。

「非常によく」の文末の述語にとっては重要な要素の一つであると言える。ただし、次の(40)のように「運動性」を持っていても非文になる場合がある。

(40) *彼は非常に{しょっちゅう／よく}田舎に住む。(作例)

(40)の「住む」は「ある家や場所で長期間生活する」ことを表し、「運動性」が希薄である⁸。また、その長期間居住している状態には「限界性」はない。(40)が非文となることから、各副詞を用いる文には「運動性」だけでなく、「限界性」も必要であると言える。

以上から、四語が程度副詞と共起すると、「運動性」「限界性」は「非常にしょっちゅう」「非常によく」の文末の述語にとっては重要であると言える。

4. 意味的な特徴

意味的に四語をみると、(41)のように「たえず」「しじゅう」と「しょっちゅう」「よく」とに分けることができる。

(41) 「あれは本物の地獄だった。ぼくはしょっちゅう{○よく／*しじゅう／*たえず}まだ夢に見ますよ。…(後略)…」
(楡家)

(41)の「夢に見ます」は「夢に見る」という行為が何度も繰り返して行われることを表す。この場合は、「しょっちゅう」「よく」は用いられる。「たえず」「しじゅう」を用いると、行為を途切れなく継続している、という意味になり、非文となる。よって、四語を、「たえず」「しじゅう」のように行為を間断なく継続している場合と、「しょっちゅう」「よく」のように同じ行為を繰り返し何度も行う場合とに分けて考察する。

4.1 行為を間断なく継続している高頻度を表す場合

「しじゅう」「たえず」は次のような違いが見られる。

(42) 時間は{*しじゅう／○たえず}流れている。(作例)

⁸「住む」のような動詞は動作動詞に属するが、長期間の状態を表すもので、「走る」「読む」のような実際の動作を表す動作動詞よりも「運動性」が希薄である。

(43) 河は{*しじゅう/○たえず}流れている。(作例)

(42)は「時間は過去から未来へ流れていく」状態を、(43)は「河はいつも流れている」状態を表し、それらには限界はない。これらは「たえず」を用いることはできるが「しじゅう」を用いると、非文となる。このことから、事態全体に限界がない場合には「たえず」は「しじゅう」より適格であると言える。また、

(44) 彼は仕事もせずに{○しじゅう/*たえず}ぶらぶらしている。(作例)

(44)は「彼は就職もしないで、なすこともなく毎日を暮らすさま」を表す。「たえず」が用いられないのは、「あてもなくのんびりしているさま」と釣り合わないからである。つまり、「たえず」には途切れない緊張感がある。

以上から、「たえず」が表す事態全体には限界性がなく、途切れない緊張感を持つものに対して、「しじゅう」の場合は限界性があり、途切れない緊張感を持たないと言える。

4.2 同じ行為を繰り返し何度も行う高頻度を表す場合

「しょっちゅう」「よく」が「非常に」と共起すると、「よく」は「しょっちゅう」より許容度が高い。

(45) この交差点では非常に{△しょっちゅう/○よく}事故が起こる。(作例)

「非常に」は程度の甚だしさを表す副詞であり、「しょっちゅう」より「よく」を修飾したほうがその程度性を際立たせると思われる。このことから、「しょっちゅう」の表す高頻度は「よく」より高いと考えられる。また、話し手の評価といった観点からみると、

(46) 短篇小説はめったに書かないけれど、しょっちゅう{○よく}新作の長篇を書き悩んでいる。(私の犬)

(46)のようにマイナス評価の場合には「しょっちゅう」「よく」のどちらも用いることができる。実例数全体を分析してみると、次の<表2>になる。

<表2>

	プラス	マイナス	プラスでも マイナスでも ない	実例数
しょっちゅう	9 例 (全体の 3.14%)	155 例 (全体の 54.20%)	122 例 (全体の 42.66%)	286 例
よく	2 例 (全体の 0.72%)	37 例 (全体の 13.41%)	237 例 (全体の 85.87%)	276 例

<表 2>から、「しょっちゅう」は「よく」よりマイナス評価を表す例が多いこと、またプラスでもマイナスでもない場合には「よく」は「しょっちゅう」より多く用いられることが見られる。

以上から、「しょっちゅう」は「よく」より頻度が高く、マイナス的に用いられると考えられる。

5. おわりに

これまで考察してきたことから、次のようなことがまとめられる。

構文的にみると、四語のいずれも時間的限定性に制約されていないこと、「運動性」「限界性」は四語の文末の述語にとっては重要であること、四語のいずれも実現した事態を表すことで共通している。それに対して、「状態性」を持つ述語は「たえず」「しじゅう」の文末にもくることができること、「たえず」「しじゅう」は否定文と呼応できること、「しょっちゅう」「よく」は程度副詞と共起できる点で異なっている。

意味的にみると、高頻度副詞には「たえず」「しじゅう」のように行為を間断なく継続しているものと、「しょっちゅう」「よく」のように同じ行為を繰り返し何度も行うものがあること、「しじゅう」「しょっちゅう」はマイナス評価的に用いられること、「たえず」が表す事態全体には限界性がなく、途切れない緊張感を持つ

のに対して、「しじゅう」の場合は限界性があり、途切れない緊張感を持たないことが言える。

また、四語によって表される事態全体は、「運動性」や「限界性」を持つ一つ一つの行為や動作の繰り返しによって、頻度の高さを表す。ただ、「しじゅう」が表す事態全体には終わりがあるという点で他の三語と違っている。

以上のことから、四語の構文的・意味的な特徴が明確になったと思われる。また、それぞれの共通点と相違点は日本語教育現場でも役に立つと言える。

参考文献

- 久米稔(1968)「頻度をあらわす副詞の意味の測定」、『早稲田大学語学教育研究所紀要』7、早稲田大学語学教育研究所。
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』、ひつじ書房。
- (2002)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法」、『日本語文法』2巻2号、くろしお出版。
- 国立国語研究所(1991)『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』、大蔵省印刷局。
- 小学館国語辞典編集部(2002)『日本国語大辞典(第二版)』、小学館。
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房。
- (2002)『副詞的表現の諸相』、くろしお出版。
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』、東京堂出版。
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、角川書店。
- 矢澤真人(1986)「反復の連用修飾成分——「動詞句の素性と反復表現の構文論的考察」試論——」、『学習院女子短期大学国語国文論集』第15号、学習院女子短期大学。
- (1987)「頻度と連続——連用修飾成分の被修飾単位について——」、『学習院女子短期大学紀要』25、学習院女子短期大学。

——(2000)「副詞的修飾の諸相」、仁田義雄・村木信次郎・柴谷方良・矢澤真人『日本語の文法1 文の骨格』、岩波書店。

使用テキスト（本文中で「作例」と注記した例はネイティブによるものである。）

孤高＝新田次郎『孤高の人』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）

白い＝赤川次郎『白い焰』（光文社文庫）光文社（1987）

新源氏＝田辺聖子『新源氏物語』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）

太郎＝曾野綾子『太郎物語』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）

24・7＝山田詠美『24・7』（幻冬舎文庫）幻冬舎（1998）

楡家＝北杜夫『楡家の人々』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）

翡翠＝杉本苑子『海の翡翠』（角川文庫）角川書店（1989）

乱雲＝松本清張『乱雲』（中公文庫）中央公論社（1984）

私の犬＝佐藤正午『私の犬まで愛してほしい』（集英社文庫）集英社（1989）

それ以外の例は『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)』で検索したものである。

<付記> 本研究は2013年に韓国日語日文学会で発表したものであり、2012年度日本住友財団研究助成の成果の一部である。

- Kume minoru(1968)“hinndo wo arawasu hukusi no imi no sokutei”,*Wasedadaigaku gogakukyoiukukennkyuusyo kiyou*,7, Wasedadaigaku gogakukyoiukukennkyuusyo, Japan.
- Kudou mayumi(1995)*Aspect • Tense taikai to tekusuto :gendainihongo no zikan no hyougenn*,Hituzisyobou,Japan.
- (2002) “gensyou to honnsitu:hougen no bunnpuu to hyoujyungo no bunnpuu”,*Nihongobunnpuu*,2-2, Kurosiosyuppan,Japan.
- Nitta yoshio(1991)*Nihongo no modariti to ninnshou*,Hituzisyobou,Japan.
- (2002)*Hukusitekiihyougenn no syosou*,Kurosiosyuppan,Japan.
- Yazawa masato(1986) “hanpuku no rennyousyuusyokuseibunn:dousiku no sujyou to hanpukuhyougenn no koubunnronntekikousatu sironn”,*Gakusyuuinnjyositannkidaigakukokugokokubunnronnsyuu*,15, Gakusyuuinnjyositannkidaigaku,Japan.
- (1987)“hinndo to renzoku:rennyousyuusyokuseibunn no hisyuusyokutanninituite ”,*Gakusyuuinnjyositannkidaigakukiyou*,25, Gakusyuuinnjyositannkidaigaku,Japan.
- (2000) “hukusitekisyuusyoku no syosou”,Nitta yoshio • Muraki sinnzirou • Sibatani masayosi • Yazawa masato,*nihonngo no bunnpuu*,1,*bunn no kokkaku*,Iwanamisyoten,Japan.

※2014年8月31日原稿受領 2014年11月1日審査通過